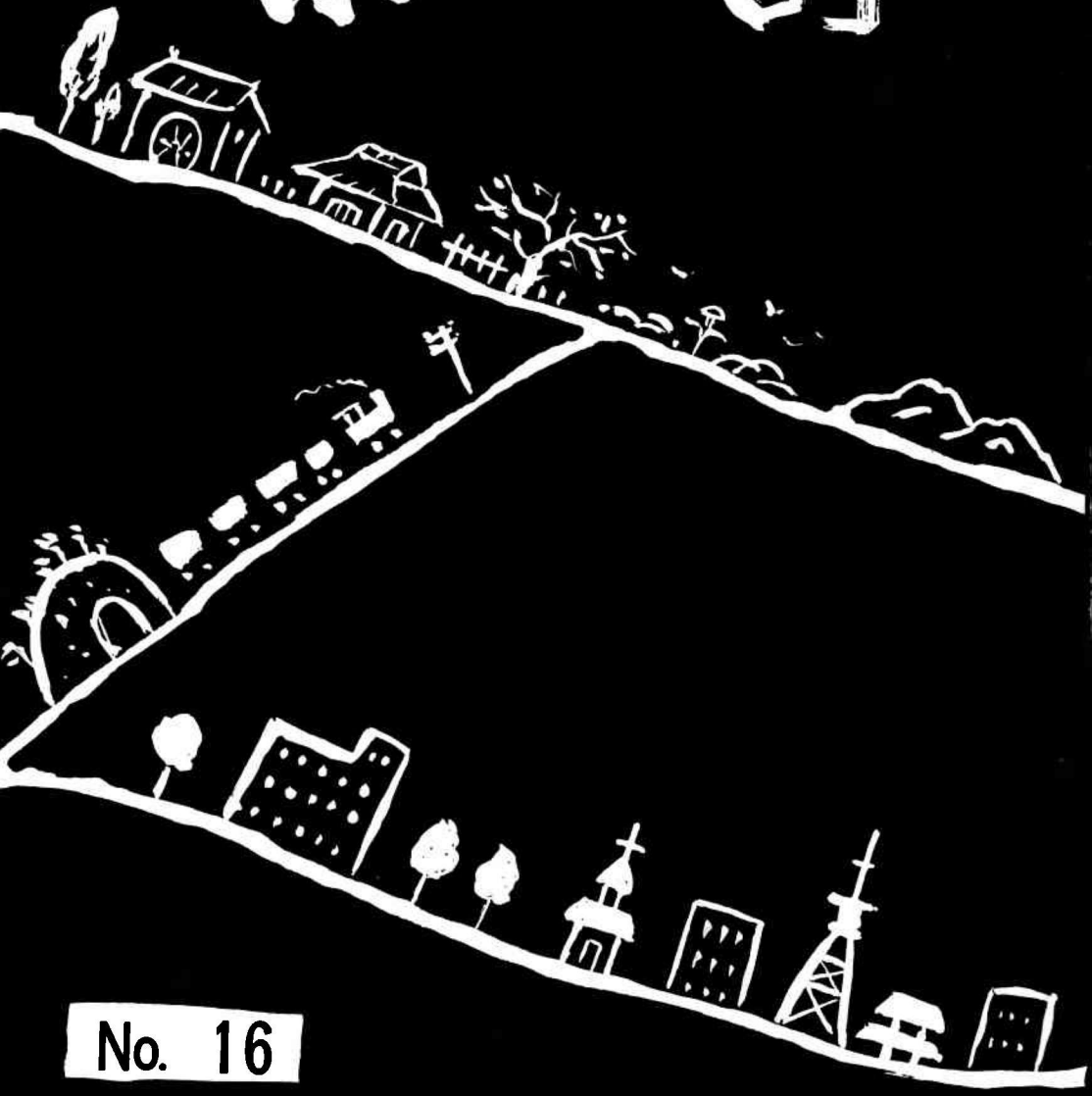
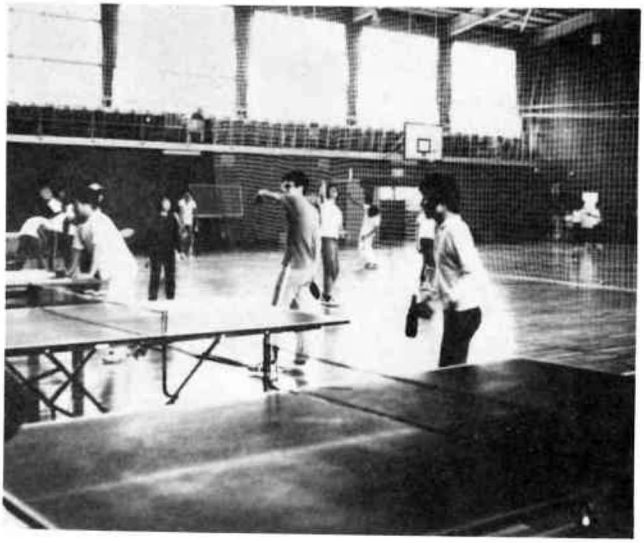
紫竹



No. 16

新体育館写真

外　　形



内部

同窓会不信を考える

初めに

ここで追求したかったのは、同窓会の意義必要性でした。　というのは、毎年紫筍作制のため、原稿を数十人の人に頼みますが、それに答えてくれる人はほんの数人です。　なぜ協力してくれないのか、同窓会に感心がないのか、私達はそれを知りたかったのです。

そこで今年は、特に報道するような大事はなかったので、これを考えよう、追求してよりよい会報をと考えました。　ところが、今回30人の人に頼みましたが、このタイトルで原稿を寄せてくれた人は、たった一人でした。

私達はどうしていいかわからなくなってしまいました、といっても一人でも原稿をくださった以上、この部分を削ることはできません、　こう考えて見ると、同窓会というのはこんなものか、こんな淋しいものなのかこんなものなくなってしまえばいい、こんなことを考えてしまいます。　私達は同窓会の必要性を単に、クラス会、名簿等の自分の利益（直接的）に終ってほしくないのです。　もっと大きな物として存在してほしいのです。自分というものを、昔の友人、同じ門をくぐった顔も知らない友に、ぶっけ、どんどん成長してほしいのです。　それにはこの会報をより有効的に利用し、会報を通してのよき理解者、批判者を作ってほしいと思っています。

なにか、編集後記のような、変な文を書きましたが、これが私達編集者の心情であります。　私達の友達の意見をお読み下さい。そしてもう一度考えてみて下さい。

ある日突然思ったこと

今日、会報の方に『同窓会不信』という題目で原稿を頼まれたのですが、考えてみれば私を含めて、高校というより過去の事に無関心になりがちであるように思われます。　時代がそのような傾向であることは明白であり、確かにそれもそれとしての利点はあるかもしれない。だがしかし、私は何か淋しい気がする。　実際昔のことを忘れたいというより、むしろ今の人は昔の事を知るのが面倒だという考えだと思う。　私は先に〝淋しい〟と書いたが、それよりも何かはずかしいといった方が当っているように思える。

はずかしいと言えば、ある日友人が、「ネェ同窓会ってあるのかしら？　私は一度も行ったことないけど。」と言った。　考えてみれば私も卒業以来一度も同窓会らしいものへ行ったことがない。　母校の同窓会があるのか、それともそういうものは全然ないのが知らないということが何か不思義であり、またそんなことを知らない自分がはずかしくもあるのです。

そういえば、同窓会紙『紫筍』にダンスパーティのことがよく載せられていますが、それがいつどこで行なわれているのか、また、それ以外、同窓会としての行動がどのようになされているのかさえわからないのです。

私はダンスパーティーのような華やいだ雰囲気の所はあまり好きではないのですが、高校時代の唯一の思い出の橋渡となるのなら、一度位は参加してみたいものであると思います。　しかしその唯一の催し物さえ、は、きりしない状態であるようです。　確かに私自身同窓会に対して、特別の協力をした覚えはありませんが、もしもう少しこのような催し物に対して、積極的にでれば、ある程度の希望も少なからずあると思います。　また年に一回でも同窓会総会など、気軽に行なうことがあればより効果的であると思います。

こんな事を望むのは無理なのでしょうか。しかし私は、高校時代が一番楽しかったし、懐かしいのです。ですから母校のことがある日突然にでもこんなふうに原稿でも頼まれれば気になるのです。

私は小学校から中学校に進んだ時、小学校

のことなどあまり思い出したりしませんでした、そして中学をでて、高校に進んだ時も、それと同じように、中学校のことが自然と心から遠ざかってしまったのです、そしてそれがあたり前のような気さえしたのです、でもそれではいけないような気がします、なにしろ自分がでた学校なのですから。

私は今ふと知人が言った言葉を思い出しました「近項の人は本当の愛を知らない」と、でもその時私は私なりに、愛ということを理解していたつもりです、今になって思えばそれは単なる表面的なものにすぎなかったのです、きっとその人は、世の中が本当に心まで都会化した、いわゆる自分以外のすべての事に無関心だということだったのかもしれません。

母校発愛するという気持、この気持ちがもっとも大切なのではないのでしょうか、本当の意味での母校を愛するということが、今かけているのではないのでしょうか、こんな気持が一人一人に備わったなら、「同窓会不信」なんていう題で原稿を頼まれずにすむでしょう

何か妙に偉そうな事を書いてしまいましたが、これはこういう事を忘れていた自分に対しての戒でもあるのです。

同窓会総務より
バレーボール大会のお知らせ

同窓会総務

秋もだいぶ深まってまいりました今日この頃、同窓生の皆様方には増々御精栄のことと思います、さてこの度、私達同窓会では活動の一端として同窓生の方々の親睦を計るためにバレーボール大会を開くことになりました何かと御多忙のこととは思いますが、高校時代を想い出しながら、さわやかな一日を過ごされる事も楽しいのではないかと思います。

賞品も出る予定ですので、御誘い合わせの上奮って御参加下さい。

日時　十月二十四日　日曜日
　　雨天中止

場所　文京グランド

形式　男女混合九人制バレーボール

申し込み方法

試合の組合わせなど準備の関係上、チームが出来ましたら、十月十五日までに左記へ御連絡下さい。尚、御一人でも当日いらして下されば、チームを組めるようにいたします。

〒170
東京都豊島区西鴨二―一―一七
田口本光
（九一七）〇七一九

〇当日は運動靴を御持参下さい。

☆　御願い

同窓会では毎日ダンスの講習等を行なって来ましたが、ややマンネリ化の傾向があります、「こんな事は……」という様な案がありましたら同窓会総務あて御連絡下さい。

ダンスを踊りませう

都立文京高校同窓会ダンス部

いま、あなたは、〝何かを身につけなければ……〟とお考えではないでしょうか？ドライヴィング・テクニック、英会話、ララワー・アレンジメント、それにシステム・エンジニアリングＥＴＣ。

これらはみな、社会があなたを有用な〝人材〟として歓迎してくれるものばかりです。しかし、そうしたあなたは、焦燥と苛立ち、あるいは虚無感さえ伴った現代病に取りつかれてはいませんか？

あなたのまわりにメロディが、そしてあなたの前にフロアーがあるとき、パートナーと共に経やかなリズムに身をまかせることができるとしたら、その時ふとあなたほ心に安らぎが生まれるかも知れません。

心のふれあいを確めつっひとときを過し、互に言葉を交わす機会が与えられるとしたら。さあこの機会にあなたもダンスを身につけてはいかがでしょうか。まわりにいる人達は、皆あなたと共に文京の学びやにひとときを過した人達ばかりなのです。講師はプロのベテラン。もう踊れる方も、あなたのダンスをブラッシュ・アップする良いチャンスです。お友達と連れだって気軽にご参加下さい。

楽しい講習会のスナップ

今秋のダンス講習会

日時　十月十日・十七日・二十四日・三十一日の毎日曜日四回。午後一時より三時

会場　文京印刷会館三階（地下鉄茗荷谷駅より徒歩五分）ＴＥＬ九四六・四四五四

会費　**一二〇〇円**　他にテキスト代一〇〇円

◎Ａ組（初級・初めての方）

(1)マンボ・ルンバ　(2)ジルバ　(3)ブルース　(4)ワルツ

◎Ｂ組（中級・少し踊れる方）

(1)チャチャチャ　(2)キューバン・ルンバ　(3)タンゴ　(4)ワルツ

それぞれ前回の復習をいたします。

レコード・パーティ　十一月七日午後五時半より文京印刷会館にて**二五〇円**

申込先　同窓会ダンス部宛に、Ａ組・Ｂ組の区別、卒業年組、住所、氏名を明記の上、ハガキでなるべく十月八日（金）までにお申込み下さい。

参加資格　同窓会々員および会員の知人。

校友によるデモンストレーション

月例研究会

中級をマスターされた方を対象として、月に一度月例研究会を開いております。（約五〇〇円）さらに技術の向上を望まれる方々はどうぞ御参加下さい。

なお毎年五月から六月にかけて春季講習会を催しておりますので、この機会も合せて御利用下さい。詳細お問い合せは、

文京区後楽二―三―十二　岸本昌次郎

電話（八一一）五二三三五

十字路

人は縛るるして縛れず
縛らずして、縛れるものなり

人

橋立寛

生きるとは、生に追い越されてたまるか、追い越されてたまるか、と告白し続けることだ。又、語り続けること、即ち沈黙し続けることなのだ。

この世界において、大衆は不可解な存在である、人にとって。人は死に向って生き続ける不可解さを感じとる。人は自分が狂人なのではないかという感情におそわれる、ある日。人は倦怠に落ち入る。その時、人は生のなんたるかを知り始めるのである。生きるとは、理性ではわりきれないことなのだ。余りが無限大であるのだ。人は希望を、明日を、永遠を拒否し、その生の不可解さと対峙し続ける中で、人生は意義がなければならないなどと思うことを放棄する。人はこの世界と疎遠になる。世界と人との不断の闘争を戦い続ける中で、人はそれを受け入れ、人は全てのもの、唯一のもの、即ち、唯一の宿命、人は必ず死ぬという不可避的なもの、それを除いて、全てのものから自由になる。死というこの予想不能な出来事を知った時、無益さという感情があらわれる。この宿命の前に、いかなる道徳も、いかなる努力も、先験的に正当なりとすることはできないのだから。そして、人は自己を完全に支配し続けることが出来るようになる。生きるとは、死をかわすことだ。必要にかわし続けることだ。人は進んで死を受け入れはしない。それは自己の明晰性を求める感情に負け、生がわからないと告白することであり、短絡的に問題を解決させ、生を見きわめることを回避してしまうことになるのだから。生きるとは、孤独をまっとうすることであり、世界と人との緊張関係を維持し続けることである。

生を意識することは、死を意識することであり、生を忘れることは、死をわすれることである。

人にとって、生きるとはこういうことなのだ。朝、起き、飯を食べ、会社に行く。会社で仕事をし、昼に、又、飯を食べる。夕方になったら、家に帰ってきて、又、飯を食べる。この繰り返しの日々のなかでのこの激烈で執拗な闘争こそ、生を偉大にし、価値あるものたらしめるのだ。人はそれを幸福と感じぢるを得ない。

「高校生活を去って思うこと」

「去る」という一言。

この言葉の持つ意味の重大さを痛感するのは、やはり去ってから一年、及び、二年立ったころではないでしょうか。

高校を卒業して二年立とうとしている現今。やっと高校時代の生活を客観視する事ができるようになったと思います。

誰でもが通るこの道を、一歩一歩、ふみしめながら今思う事は。

三無主義だとさんざん言い、又、言われてそれですら個人がその無関心に気づかないという。要するに、聾で、唖で、盲だった私であった。

こんな私を「聾」から救ってくれたのが、文京バリストでした。あの事は一生忘れられない事柄の一つです。私はバリストに感謝こそしていますが、憎む事はできません。

今思えば、確かに、「やんちゃ坊主」と同じような所がありました、というのは、一つ

には、お互いに自分の意見を主張ばかりで、相手の意見を充分に吟味して考えながら聞くという態度に欠けていたということ。

親・先生との会話だの大声でさけんでいても、私達のこのような態度が、まだまだおいつかないように思います。

私は決してバリストを攻めているのではなく、現在の私達の態度のできていない事を責めているのです。

それに私は、まだまだ啞である自分に失望しています。というのは、自分で正答がわかっていても手を上げられないということなんです。いったい、いつごろからこんな自分になってしまったんでしょうか？

幼稚園の子供達に為りはありません。

私は、そんな子供達を大切にしてあげたいと考えるのです。私のぶんまで手を上げてもらいたいのです。

こうして二年という歳月が、私を客観視できる位置までみちびいてくれました。

今ここで私に言えることといったら、多くの経験をして、その経験を人生にプラスにしてゆくこと。

最後に、高校生活を去って思うことは、反省とか後悔とかいう言葉では決してなく、ただそこに、素直という言葉で讃えられる気持がほしかったということです。　完

北杜夫を斬る

（文集の思い出より）

小林良次

私は前回ある中学生に、卒業文集に載せる原稿を、たのまれたことがあった。

「前回…。そう、あれは今から三年ぐらい前のことと思ったが、私は中学生の文集だからといって、手を抜くようなことはしなかった。そうすることを、私の良心が許さなかったのだ。その作物の内容は今でも、しっかり覚えているというより忘れられないのである。というのも、あれから大きなものは手がけなかったのだから…。

一では、少々、今日に至るまでの私の成り行きというか、いきさつを紐解いてみようか。

私が、その文集に寄せた作物。題名は「美青年回顧録」という、その名の通り純文学書きおろしであったのだ。それは、ほんとうは文芸公論に依頼されていたものだったのであるが、それをあえて中学生の文集に載せたのには、それなりの訳があったのである。

私は中学生というものの頭脳を信頼していたのだった。彼らは決して私の気持を、裏切らない、きっと読みこなしてくれて、おそらく涙を流してくれるだろう。そればかりか感激の念でいっぱいの彼らは、その気持を投書という型で僕、又は出版社に送ってくれるだろう。そうすれば、どうなるか？当然のことながら、その年のＮＳＣ（日本作家人気投票）で念願の北杜夫氏をぬいて一位になれたのである。この一位というものに、どんな特典があるか諸君は知らぬと思うが、これが又もの凄いのである。とにかく今までこの投票が初まって以来、北氏が一位を一度たりとも譲らなかったのである。では、彼が今までその特典を何に使用したか、わずかではあるが、私の知っている範囲ふれてみるが、これは極秘である。このことが、私の口から出たなんてことが知れたら、私は生きていられないだろう。……おや、何か聞いたことのあるような文句。私が一番アレルギーとしていた勉強が、身についてしまったらしい。

まず私の覚えている限りでは、彼は海外旅行に行きたいと言い出したと思う。今だから猫も、しゃくしも海外旅行と隣りの庭に、はいるみたいな気軽さがあるが、その当時はまったく大変なことで一大センセーションを巻きおこしたのである。なぜ毛唐の国に行きたがるのか、週刊紙や新聞の社説、果てはＮＨＫのニュースの焦点でとり上げられたものだが、それについて彼の口から直接聞いた話だから多分ほんとうと思うが、マスコミからのがれるためというのである。彼は頭の中でプ

レスリーの人気いやビートルズの人気を想像していたらしいのだ。ビートルズの人気と自分の立場を混同したらしいのだが、いささか計算違いの様だ。彼は行く前に自分の、プロマイドを何千万枚と作らせておいたし、レコードも自作自演のものを数枚録音しておき、おまけに週刊誌関係には毎週自分の海外生活を書いて送ると約束し実行したのだが、それらの結果がどうなったか、これから少しふれて見るが、その前に彼が羽田を出発する日のことを取り上げてみることにする。

彼は当然押し寄せてくるだろう、ファンの波を警戒して前もって警察関係の警備を、いたって強引に頼み込んだのであった。

ところが当日、見送りに来たのはまったくの身内だけ。それでも彼はその異当な事実を知らなかったのである。なぜなら彼は護衛の警官を自分の回り、いっぱいに囲ませて（ちょうど、押しくらまんじゅうの様に）飛行機に乗り込んだからである。それでは何で警察官がファンも来ないのに、その様に警備したかというと、それはまったく警備なんかではなかったのである。その日が異常な寒さで、彼らはみな、その寒さに耐えるために押しくらまんじゅうをしていたのであると、ある警官が、にっこりしながら語ったのである。だから私が見て、そう思えたのはあたりまえのことだったのだ、それに少しばかりの親心の様なものがあって彼を傷つけることは、さけるべきだとの考えが彼らの中にかたまっていたのである。こう見ると今日の警察官よりずっと人間的だったのではないかとも考えられるが、そんなことは、どうでもよい。とにかく彼が日本を離れてからというもの、前もって彼がやっておいたレコードの売れ行きはというと、まったく売れずに、そのレコード会社は、すぐつぶれてしまったことは、わざわざ書くまでもない。このレコードというのは、やっぱり売れる代物ではなかったようである。一曲は、バッハの曲と日本のお経を混ぜ、それをトランペットと三味線で演奏させ、そして彼がシャルルアブナブールの歌のように語りかけで歌うというもの。この曲は活気的なものだと言えば言えないこともないのだが、少々強烈すぎた。ラジオの深夜放送で流した所、異常な反響。やめろ胸くそが悪いというのが、その大半をしめたのは当然。すぐに放送禁止となったのである。もう一曲は、子ども向けにねらったものらしいのだが、メロディーは、ほとんど童謡から取り歌詩は、浪曲子もり歌で、それをトム＝ジョーンズの曲の様にアップテンポにして、そのいろいろな所で、トム＝ジョーンズの様な遠吠に似た、「ワオ―〜〜〜」や「ンー。ハイ。」という奇声を入れたのである。このアイデアは、悪くなかったのだが、レコードの売れ行きアップにつながらなかった。子供の世界では、浪曲子守歌の歌詩がはやって、又あの奇声があいさつがわりになったのである。これに対してPTAが大反対、教育の上に悪い影響を与えるというので、三悪何とかにいれられてしまったのである。けっきょく、ヒットのヒの字にもならなっったのである。ただ一つ救われたことは、彼がLPを出さないで旅行に立ったということである。彼は、LPの企画をだいぶ進めていたというのだから、危ない所だった。

次にプロマイドだが、これはレコード以下だったのだから、売れゆきなんてものではなかった、この売れなかった原因も、もっともだったようなので少し、解説してみると、一つの写真は指名手配のにそっくりだったし、一つは彼がロングのかつらをかぶってヌードになったのだが、これが少しも反響が上がらずに終ってしまったのは、やもうえないことだろう。ある新聞のほんの片隅に写真と、一言「ビテカントロプスの昼寝」という題がついていたのである。

それにしてもファンとは、薄情なものである。口先でちゃほやしても、まんまと彼にハリ手をくわわしたのだから。それからもう一

つの代物である週刊誌であるが、これもけっきょく会社をしめ殺した結果となった。スタートは、日本一と名高い週刊夕日だったが、そこが三週きりで、彼の海外レポを落としたのである。スタート第一週は、物珍しさと宣伝効果のおかげで普段の倍、売れたのである。ところが第二週目では、普段の二分ノ一になり第三週目に至っては、普段の六分の一になってしまったのだから、雑誌社も汗ってすぐに北氏、下痢とノイローゼの為とことわりをつけて中止に踏切った。そのおかげで、夕日新聞は、ことなきを得たのである。北氏の海外ルポは次に〝ナンデー時々〟に、そしていろいろな雑誌社を転々とし、最後は〝非凡パンツ〟がつぶれるところで最終回を向かえたのである。けっきょく、彼がマスコミ関係に与えた損害を総計すると、三億円ちょっきりになるのである。この金額に、ふっと、考える者がいるだろう。そうなのである。あの事件の金額と、……である。彼は、多少口ベタで、うすのろの所があっても、あの快盗ジバコのズバ抜けた感覚があるのである。だから当然、三億円は、彼の仕業であるというのが、もっぱら今の文壇での通念である。もっとも彼はこのことを質問された時「今頃気づいたのか…。」ともらした。　この言葉は、実に微妙であるが、彼は今もなお、ホシとして上げられていない。というのも警察関係が、まったく彼を無神しているからである。彼のその、ニヒルな言葉にも、ただひとこと「よく言うよ！」と言ったきり真面目に考えないのである。「あんなのをつかまえた日には俺達は、恥しくて世界連邦警察から見はなされるよ。」と、ある主任が酒場で私にもらしていた。その主任の言葉を補うと、幼ない子供から、あめ玉を奪う様な真似は、できないというのである。だいぶ話が、それたが、彼が一年ぶりに日本に戻ってきて、びっくりしたのは、火を見るよりあきらかである。町中には、彼の宣伝ポスターが、あらゆるゴミ箱につまり、電信柱にはってあった彼のイラストや写真には、犬が…をひっかけるだけで、人は誰もふりかえろうとしない。行く前には、あんなに立派にそびえ建っていたレコード会社のビルは跡形もない。又、雑誌は、非凡パンツまで落ちているし、帰宅してみると家の中には、あらゆるものに赤紙がはってあるし、非難の投書が部屋中に散らばっていたのである。彼の妻は、とっくに実家に戻ってしまっていたし、待ちかねていたのはネズミとネコと、親友のプレスリー（ノミ）とニクソン（ゴキブリ）だけであったのだ。

　それからというもの、彼は、ただひたすら書きまくった。小学校から大学まで雑誌に、小説・作詩、和歌、俳句。とにかく強引に書き続け、それを恐喝スレスレで売り込んだ。その甲斐あって、翌年も、わずかの差で純文学を根ざした私を破ったのである。やはり、このバイタリティーというものが、彼の魅力かつ偉大な所だろう。これをとったら彼に残るのは、雑草の様なものばかりだからである。ここまで書いて私は、はっとした。気づいたのである。それは私が一位になれないことを妬んでいるからして、こんな彼に関して、いやらしい中傷していると、ファンのみなさんに誤解されるかもしれないということである。しかし、諸君は素直に、うけとってくれるだろう。なぜなら事実は小説より…というからだ。私が言わんとしたことは、とりもなおさず最後に書いた、彼の偉大さという点なのだからである。私は、二位にいつまでも、甘んじていようとは思わないが、彼を先生として慕っているから、それほど強い、執着心は猫の額ほどもないのである。私だって彼の作物の愛読者なのである。

　ここに来て、ふり出しに戻るが、私自身けっきょく中学生の文集に載せたのに一位になれなかったのだ。中学生は、まだ純文学というものに文学の真髄を見い出せなかったのだと思う。だから私は、ここに来て再び賭けたのである。三年前に私を裏切った中学生。そ

れは、まさしく君達だったからである。私は、もう君達が、いい加減文学の真髄に感動してくれると信じている。君達は私に、あたたかい感激の手紙をくれるだろう。まちがっても、あの苦い思いは、させないだろう。

ここまで書けば、もう思い残すことはない。後は十二月三十一日の投票結果を待つのみだ。私は、年中にもう一本、短いものを書くから期待していてくれたまえ。

最後に、よく愛読してくれた諸君に私から一言告げておこう。

「いかなる若者も、その目的を達成しうるか否かは、まさにその人自身の責任であり、つまり、まさにその人次第であるということを認識しないうちは人生競走に、正しい意味で第一走を踏み出したとはいえない。」何と、どっきりする文句だろうか。急に胸くそが悪くなってきた。もうやめる……。

――――――おわり――――――

※追　純文学とは、必ずしも、むずかしいものではないことが、諸君におわかり頂けたことと思うが、私のこの文章で、だいじだと思った所には赤でラインをひいて、しっかり理解できるようにカッコをつけることを、お勧めする。もうこれらの操作に慣れている諸書には、余計とは思ったが、老婆心から。

なお、登場人物、団体名は、すべて架空のものでありますから、あしからず。

この一位というものに、どんな特典があるか諸君は知らぬと思うが、これが又、ものすごいのである。今でこそ芥川賞、直木賞などが、ちやほやされるが、その頃はそれらは問題にならなかったのである。

市橋栄一

右手にかみそりを一枚持って
左手首を私の目の前に出して
血管をさがす
右手をしずかにおろして
かみそりを、沈ませる
パクッと口を開ける
すぐ血がふき出て来て
暗やみの中に……

私が自殺する時の方法（一）

形式的という言葉
何かが足りないという言葉
今感じる
作者は何を言おうとしていますか
その答えは
おりこうさんの答え
僕はそのおりこうさん

私は、私の時の流れによってもたらされる死は、自殺という行為によるものではないだろうかと予測した。

私自身への手紙より

私自身の進路に対する問題点は数字、物理、化学の力不足からきたのだと思います。それと共に、権力に対する反発があったのです。これは、科学（自然）者に成った場合、政治権力というものによって動かされて行く世の中をどうすることも出来なくなってしまい、一生懸命、人間らしく生きようとするもの、人間のために生きようとするものが、片偶におしやられてしまう現状を見ていることが出来なかったからです。もし私が体制内に組み込まれてしまった時、それに対する反発というものは自然と制限され、もしかりに反発出来たとしても、ほんの小さなものでしかありえないのではないだろうかと思ったからです。そのために、ジャーナリストになろうと思ったのです。美しいものを破壊することを批判を通して防ぎたかったのです。自分自身の性格を無神したといえばよいのだと思います。

もう一つの点は、人間にとっての幸福を考えた時、現状の科学の進歩に伴う、公害問題、生命の問題がつきまとったからなのです。生命の問題とは、医学や生物学、薬学に進んだ

場合、実験の材料として、生命を当然使用しなければならなくなるということです。私には人間以外の生命というものを犠牲にして、人間が生きてゆくということに納得がいかなかったのです。今でも生命を絶つことには非常な抵抗があります。私自身、実験される生命の立場に立ったならば、殺されるのはいやです。それを無理やり殺す……。人間のために、その言葉のみで！（今、世の中を見回せば、そのようなことが行なわれています。

又、私がその学問に従事しなくとも行なわれてゆくだろうと思います。）私は自分の手を汚したくありませんでした。それまでして生きて行きたくなどありませんでした。ただ逃げようとしました。そして、もっと人間らしく、生命を殺さずに生きてゆけるような所に行こうとしました。そして、医学も薬学も生物学もヤメロ、ヤメロと叫びたかったのです。いくら私が叫んでも、人間はやはり人間のために生きてゆくのです。どんなことをしても生きてゆくのです。私はその時、自殺という行為をもって人間らしく生きようとしました。私が生きてゆく以上、生命を数多く犠牲にせねばならないから、私ばかりでなく人間が生きてゆくとしたならば……。

又、それに加わる要因が他からも生じてきたこともあるのです。というのは、私自身で私の感情、行動をおさえられなくなって来たからです。（以前はおさえられたということではなく、柳えられると思っていたので、努力を続けてきたのです。）その行動の例を上げてみれば、私は自動車に興味を持っていました。しかし、その車によって起こされる、さまざまな事故、公害を見た場合、カッコイイだのスピードへのあこがれだのなどと言っていられないのです。車に轢かれて毎日死者が出ているのです。車は殺人マシンなのです。人間にとって車が発明されたことは、大きな進歩であったかもしれません。しかし、倫理感をドライバーが持っていないのです。動かし方だけ習って車がどんなに危険なものであるかなどということは、全く考えないのです。文明の力も、これでは殺人を引き起こす機械なのです。それに加えて車を売るほうも売るほうで、いかにもスピードが出そうなカッコにしたり、スピードの出る車を製作しすぎたのです。本来車のあるべき姿をまったく無視してしまったのです。このようなことに私は、はなはだしい怒りを覚えたのです。そして、車を、カッコイイだの、スピードを出したいなどと思ったりしてはいけないと思ったのです。今まで車の性能について友人と話していたことについても、もう話すのをやめようと努力しました。が、気ずかずに話してしまうことが何度もあったのです。どうしても自分が抑えられなかったのです。

笑いについても同様でした。人がヘマをしたから笑ったり、顔を合わせてつくろい笑いをしたり、なにしろ、偽笑をしたり、本当につまらないことで笑ったりしている自分を見つけた時は、ショックでした。自分自身がなさけなくみえました。だから、私はつまらないことで笑わないようにと、自分を抑えた。しかし、無意識のうちに笑っていた。このことに自分で気付くたびに以前より大きなショックをうけ、どうしょうもなく、やりきれない気持でいっぱいになってしまいました。

NO！といいきれない苦しさにつきまとわれました。どうしょうもないんじゃないか、自分で自分を抑えられなくなったら。人間として生きる価値がないのではないか。神が私に正しいものを見る目を与えてくださった。そして、それが見えたならば抑えよという気持を与えてくださった。それが出来なくなったのではないか、生きていることは神へも、私自身にも偽りの行為であったのです。したがって自殺という行為が自然と浮んできたのでした。その行為は人間のみにしか与えられていなかったのです。なぜ人間のみにしか与えられなかったかを考えた時、もし、人間らし

く生きることができなかったならば、生きていても害になるだけであるから最後に人間らしく生きる手段として、自殺を神が私達に与えてくれたように思えた。自殺は人間にとって一つ権利である。それでなければ自殺という行為は私達に与えられなかったと思う。

なにしろ、何をやっても、もうだめだという感にとりつかれてしまった。私の歩むべき道などなくなってしまった。

今、私が生きているのは、人間らしく、又、人間として生きてゆくということは、すぐ矛盾に満ちて生きてゆく、生きてゆかなければならないのではないかと思っているからだと思っているからです。

が……。

〝付〟美が見えた時、私はそれを絶対化しようとした。しかし、どうしても美というものがこの世界に、私達人間によって実現することが出来ないことが分った。その時、私は、人間が矛盾するものであることを認めることは耐えられなかった。又、神が美を私に見せ、醜いものを排斥する心を与えてくださったということは、私自身からすべての醜いものを排斥することであると考え、自分自身を抑えきれず、そのまま生きてゆくことによって齎される醜を知って耐えられなくなったと伴に美をあくまでも追求しなければならないのが人間であると思った。それは、自殺によってのみしか齎されないということを発見した。

今も、完全なる美は自殺によって齎されるという考え方は変らない。もちろん、人間においてである。

完全なる美、私は自殺であると、自殺によって齎されると書いた。しかし、私自身それを完全なる美であると思えないのである。本当の美というものは、概念として浮び上って来る、が、人間には手が届かないのである。超自然によってのみ齎されるものであり、それを絶対と見た時、人間における美の終局として、自殺が残る、表出して来るのである。

私は、今、自殺をしないでいる。それは人間における美の追求が比較でいいと思うからである。このことは人間の矛盾によって齎される美と醜を比較して、醜を美が越えていればよいということである。

私の目の前に、写真がある。
パリが解放されたときの……
私は、体の内に、もり上ってくる歓激を感じる。
自由なんだ！
自由なんだ！
うれしい
ただうれしい。

一つ考えてほしいこと

これから、私達が進む道が、自分にとって何なのか、人間にとって何なのかということを考えてほしい。

大声で笑うのもいい、クスクス笑うのもいい。しかし、その笑いがどんなところから出ているのか、考えてほしい。自分を見つめてほしい。

物を食べた時、考えてほしい。それがどこから来たかを、大切な生命が私達の犠牲になっていることを考えてほしい。

自分の踏み出す一歩、それが何を意味するか、ただ単に無意識の一歩とせずに、意識下の一歩にしてほしい。

何でもいいから、考えてほしい。それが何であったのかということを、考えてほしい。

※注

小林君・市橋君の文章は一九七〇・十二・九に発行された三E（四十六年三月卒業）の文集から抜粋したもので、紫筍のために書かれたものではありません。その為に会報向けではありませんが、一世代の断片としてあえて掲載することにいたしました。

（編集委員）

ある崩壊

渡辺忠之

秋はいつから秋になるのかわからない。シトシト霧雨が続いて涼しくなり、虫の音がひどく騒がしく、気づいた時から、熱い陽ざしは昨日の夢になり下がり、すべては秋になり変わる。

初めての絶交状を送った時、これでいいのだと言い聞かせた。この日は苦悩の末に限界を見た時、必然としておとずれてきたのだった。心の中では彼の驚きに同情する私と、感情を殺した冷徹な私が葛藤をしていたが、苦悩し続けていた頃の不論快さはかけらほどもなく、勇み足的仕業を無気味にも快く思う私の魔性が笑みを浮かべていた。それは激しい反動だったのだ。

私は友情とはいかなる者か考えた。私と彼との友情をも考えてみた。空しかった。私の考えは、彼には理解出来なかったのだった。

私達はよく山へ行き人生を語った。そして柔道を通して交友を深めた。だがそんな内にも破滅の非はあったのだろう。

ある八ヶ岳へ登った夏の日の事である。その日は快晴とは言えず、安の定、登り始めて三時間程で降りだした。にわか雨だったので続登したが一時間程で本降りになった。私達は着換へを兼ねて長休止を取った。荷物を早くまとめた私は、一足先に発っ事にした。すこし登ってふた又に分かれている所があったので、太く山道らしい方を行った。それがすべての誤ちであり、はぐれてしまった。三時間程悪戦苦闘した後、行者小屋近くの地点まで行ったらしい。近くの笹やぶで人の気配がした。雨の中で、一人心細くしていた私はとっさに、彼らだと思った。私はホッとした。私はテレ隠しの笑いを浮かべながら、彼らの許しは、願うまでもなく当然と考えていたが彼の口からは、トゲトゲしい表情と共に、私を責め立てる言葉が返った、そして計画の一部変更を伝えてきた。彼には計画の変更がとても残念だったのだろう。

しかし、彼に親友としての寛大さを求めた私は全く裏切られたのであり、まして他の友人の前で責め立てられたので、男としての自己防衛本能が刺激されたのだろう、彼をなぐり倒さんばかりに怒り言い伏せた。

この時の争いを後で話しあった事があるが彼に言わすと、どうにも妥協できない性格が激突したのであり、それは生活環境の違いが生みだした、と言っていた。

私から見る彼は、知能の高さと自尊心の強さの反面、古い考え方を持った、計算高い男だった。

私達はしばし哲学的興味を話題にした。非常に信秘的であり、現実逃避にはもってこいだった、がそれ以上に深く考えるという事が好きだった。数学の得意な彼は、方程式を立てるがごとく綿密に、明白な事さえもいちいち紙に書いて話を進めるのが常だった。私は直観をうまいぐあいに結びつけ、ひとつの概念を説明、理会する方法を常としていた。女の美しさに対してもよく話題になった。

「女の美しさは美の神の仕業だね。美しい女性は、ただその女の肉体だけを媒介として神が顔を出してるのに過ぎぬのだよ。輝ける美に対し、その精神はあまりに愚かすぎるではないか。どんな女でも世間で言う程、彼女らの人間性に違いなどないね。」

後に私はある女を身近に意識した。彼女には未熟さと無知が光っていた。ある日突然、私は彼女の存右に気づいたのだった。それゆえ私は驚いた。何が無知な美を私の前に表わにしたのか。夢の中だけの絶対美を彼女の中に見たのわ現実だったのか。

彼女の無為なまるざしは私を感動させた。だが男の崇光さに憧れ、それを生活上の信念としていた私には、女性を恋する事は許されない事だった。象徴の如き彼女の女らしい美

さが内面からほとばしり出る物であっても精神の世界に生きる私には例外ではなかった。

私はただ美意識と、自分の信念を高める事だけに専念した。そんな私に、彼は彼女への恋心を告白してきた。だがそれ以後も私の彼への　秘かな賞讃は変わりなく続いた。個人的精神作用をだれであろうとも束束はけっしてしてはならないからである。

しかし徐々に私を卑怯者と思い込んでいったらしい。嫉妬深い彼から見れば、私の動作の端々に恋する者の動揺があったのだろう。

彼は自分の進路について確固たる考えを持てないでいた。学問への情熱と家の商売の両立は不可能として悩んでいた。私は自分なりに忠告したが限界は明白だった。

彼がよく私に語った事がある。

俺は中学時代、優等生といわれ、ただ勉強と柔道に精を出し、文京へ来てからも山登りと柔道と勉強のみに専念してたのだ。だが、今、大学受験に失敗してみると高校生活はまちがっていたと思うし、自己嫌悪でいっぱいだよ。女子と話した事さえないし、交際するなど考えられなかったからな。

鋭い知能ゆえ、自分の立場が見えすぎてしまい、過去の日々にとらわれて、すべてに劣等感を持ち、より自分を苦しめていた彼。

彼の事を書いた当時の日記がある。

前からの心の重荷がひとつ取れた。彼が自我を取り戻したからだ。ついに言った。自分の事は自分で処理しなければならないと。子供の頃からの生活に反発を感じ、それが劣等感に通じていた彼の弱さを打ち破るひとつのきっかけになるからだ。

彼にとり、片思いであったにしろ、としが唯一の自己存在を知る事だったのだろう。

ある酒を飲んだ晩語った。

俺はいつも俺だけの創造主と自分ともうひとりの自分自身と話しをするんだ。俺は神は常に善者の味方だと信じていたが、いざとなると必ず俺を裏切るんだ。

私は彼の深い苦悩が言葉の端々に出るのを見た。そして背筋が確かに寒くなった。表情までも異様であり、それは薄暗い照明の為だけではなかった。そして私の全身が崩壊を見た音をたてて壊れ去った。

私達の友情など馴合いだったのか、と思った。すべてがそれを知った時から不論快になった。長い長い絶交状を書いた。

友情は険しく尊い物にちがいない。

編集後記 (1)

私達は、紫筍を編集していて、同窓会の仕事の困難さを毎回ひしひしと感じさせられます、　というのは、同窓会の仕事自態、積極性に欠くように思うからです。

結局これからのこと、すなわち未来というより過去、すんでしまったことというイメージが強いからだと、また同窓会に従事している人達が、みんないくらかの仕事を持っていて、そのかたわら行なっているからです。実際、私達が会報を編集していて、積極的に取り組んだとは思われませんでした。　初めのうちは、今度こそ、今年こそりっぱな内容のあるものをと意気込みはしましたが、原稿が思うように集らなかったり、また全員が集まる時が、なかなかなかったりして、どうも行動が最初の意気込みと、共なわなかったようです……このような私達の状態プラス、会員の方々の協力のなさに私達の希望はより打ち崩されてしまいました。

私達が最初に三十名の方々に原稿を依頼しましたが、私達のもとに戻って来た原稿はたったの一名、今年は『同窓会不信』をタイトルに会報を統一しようと思いましたが、このような状態で、それも現実化しませんでした、とても残念でなりません。　ただ、一つの救いは、同窓会不信を表わす事柄がここにできたということです。　そのタイトルのごとくこの会報を作ることができたことをうれしく思っております。　皮肉めいているかもしれませんが、これは偽らざる気持です。

さて、来年はタイトルが変わります。その時のために、皆様に次号の原稿を応募したいと思います。　また今回の会報についての、御意見、御感想がありましたら同様、どしどしお送り下さい。

最後に私達一同、皆様の御期待にそえなかったこと心からおわび申し上げると共に、未来に向って努力したいと思います。皆様の御協力お待ちしております。

また、今回会報に御協力してくださった方々に、心からお礼申し上げます。

どうもありがとうございました。

連絡先　東京都北区上中里二―二十一―三
柿沼孝明
TEL（九一一）九五六一

(2)

「では、これよろしくお願いします」という声と共に、会報の編集も一様終りを向える、ああよかったと思うか思わないうちに、私の心には「みんな読んでくれるかしら」という、不案が走る。　みんなの読まない会報ほどみじめなものはない。　「ああ、神様」と叫んでしまう。　それにしても今度の会報ほどやっていて情けなく、つらかった事はないであろう、編集者にとって原稿はガソリンと同じ、これがなかったら、どうにも動けないのです、悲しいかな、今度はそのガソリンが、ほんの2、3滴しかなかったのです、これではどうしようもありません、右も左も、前にも後にもとにかく一歩も歩けない状態だったのです。名ドライバーがいても、ガソリンがなくてはだめなのです、車は走らないのです。

私達もずいぶんと悩みました、これでいいのだろうか、今がこうじゃ来年は、去来年は……と原稿が集らない、しかたないネじやすまされないのです。

同窓生の心をつなぐ、唯一の会報がこんな状態とは思ってもいないことでした。

私達は、別に編集の労を犒ってもらおうなんて思っていません、でも私は〝しかたがない〟で終らせたくないのです。

どうか皆さん、これからの紫筍に協力してください、そして我々だけでなく、みんなの手で会報を、そして文京高校同窓会をよりよいものにしようではありませんか。

表紙のことば

『みな様、世の中、右を向いても、左を見ても、真暗闇じゃございませんか……』、なんて文句が近ごろ流行っているようですがそんな言葉にカッコイイ、なんてしびれていないで、あなたの回りを、ちょいと見回してごらんなさい、私はこんな言葉の一つも、言いたくなるじゃありませんか。

「みな様、右を向いても、左を見ても、我が同窓会は、真暗闇じゃございませんか……」と、私は高校時代の思い出は、そんなものとは思いません、表紙のごとく人々の下には、一本の線でつながれているのです。

真の友は、こんなところにいるのではありませんか。

是非御覧下さい！

同窓会名簿係よりお知らせ

同窓会の名簿係では、毎年、同窓会名簿を充実させるため、色々な活動を行って来ました。昨年と今年は名簿の不明者をなくすことを目標に、活動を行っています。

次の方々は、昭和46年8月現在、住所、その他不明となっています。もし御存知の方がいらっしゃいましたら、文京高校同窓会まで御連絡ください。また、住所変更などをなさった場合も、御連絡ください。

41年卒18期

A組 醒木由美子
B組 川村保男 武藤重治 柳下謙次 鬼形一恵
C組 穴原弘完 上村猛 高橋永次 藤井博 武藤明彦 矢野宗生 山神一男 草雉留美子
D組 武田玲子 橋本裕子
E組 茨内享 伊東英雄 小須賀洋 坂本幹夫 馬場康雄 青木初枝 栗原由美子 勝呂則子 横倉礼子 勝倉孝治 斎藤津弘 鈴木進 根岸永福 高橋昇
F組 伊藤綾子
G組 那波俊晴 鶴沢澄子 柳沢郁子
H組 金井茂 増沢照司
I組 木村奉憲 野崎真輔 望月国臣 柴山幸枝
J組 阿部賢次 大野克美 小島康正 田村道明 遠藤信子 及川節子 駒木峰子

42年卒19期

A組 石井康
B組 板谷宗 小島光 藤春清 渡辺真一 大沢澄江 古賀ふみ子 野口真紀子
C組 浜屋淑子
E組 浅野志津江 兼坂二三江 島田美代子 馬場キヨ子
F組 前田真一 井原潤子 北原慶子 戸井れい子
G組 石井秀一 大庭正紀 小中山彰 田中正造 宮城正雄 山本伊佐男 森秀子
H組 石綿康男 萩谷方文 堀越ひろ子
I組 井上登 石井望 石川彰 大森実 越野俊行

43年卒20期

A組 菅生理夫 西川一幸 村田陽子
B組 松枝真平 浅井陽子 黒沢さち代 浜野明子 平川照子
C組 今沢裕 菊地礼子 広瀬直美
D組 大村隆 佐々木徳実 恩田美南子
E組 尾形哲男 吉川博晶
F組 今井勇一 秋元紀子 熊谷公男 滝本正和 太田美津江 吉岡広子
G組 海老原章 原啓志 宮津登志幸 森教明
H組 栗原一博 山本敏雄
I組 有田八州穂 平野信義

44年卒21期

A組 金子克巳 竹田進
B組 市川小百合
C組 清水義雄 宝田雄二 竹詰基文
D組 阿部秀夫 遠藤俊一
F組 池田和彦 浜田正美
G組 佐々木均
H組 清水純 原裕 西勝和世 福持千津子
I組 相原博子 秋葉あつみ 小林純子

四十六年就職状況

富国生命	坂本啓子	三菱銀行	杉浦千恵
三菱商事	三堀和子	新日本製鉄	市橋美紀子
	菅野京子	ニッカウィスキー	笠美奈
	安彦恵子	京王デパート	古旗南諸美
	霜越悦子	高島屋	細田寛子
日立金属	野本恵美子	山一証券	水野千尋
住友商事	藤井千保子	安川電機	堀口美也子
三井物産	島良江	兼松江商	横山美紀子
			赤堀恵子
			襟川三津枝

キャノンカメラ	加藤ヒロミ	エーザイ	柴谷恵子
日本銀行	牧野洋子	安田火災海上	須貝節子
日立製作所	宮田玲子	京王プラザホテル	関根美枝子
富士銀行	佐藤美代子	中央卸売市場	高城洋子
	山口久美子	住友金属	辺見久子
住金物産	壷屋るり子	日商岩井	野田敬子
日本航空	松本恵美子	平凡出版㈱	清水真理子
	和田洋子		
日綿実業	倉林玲子		
倉敷レーヨン	源馬りよ子		

昭和45年度　都立文京高校同窓会　会計報告

昭和45・4・1～46・3・31の間の会計は次の通りになります。

昭和46年3月31日　　会長　渡辺剛彰
　　会計　太田敏夫

監査の上、正確であることを認証します。

会計監査　河野一郎
〃　榎本幸三

1．財産目録（46.3.31）

イ　貸付信託（基本財産）3,290,000円
ロ　現　金　221,826円
ハ　物　品　①両開き書庫(1)、②ハガキ印刷器(1)、③書類入れ(1)、④手提金庫(1)、⑤机(2)、⑥椅子(1)、⑦フアイル(1)、⑧ストーブ(1)、⑨やすり板(1)
ニ　郵便口座（3号）　3,890円
ホ　奨学基金　82,430円（うち1,000円は現金）
ヘ　会館建設基金　64,193円

2．現金

㋑収入	1,952,991円	㋺支出	1,731,165円
終身会費	1,174,500	経常費など	695,950
(46.3卒435名 ㋑2,700)		内訳 各部（会計を含む）	40,000
終身会費など	17,480	名簿	333,000
(45.3卒 4名 ㋺4,390)		会報（送料とも）	275,940
繰越	558,747	同期会補助	6,580
利子	158,225	人件費	16,700
名簿代	6,800	通信〃	13,960
会館建設基金	14,215	運営〃	9,770
奨学基金	20,000	会館基金へ	14,215
雑	3,024	奨学基金へ	21,000 ＊
		貸付信託	1,000,000 ＊＊

＊　収入より1,000円多いのは、前年度寄付のあった分を、本年度になってから奨学基金の方に入れたため。
＊＊　内訳は、44年度分・45年度分・46年4月満期分

㋩繰越し　221,826円

2 進学状況

進学校	新卒	45	44	計
〔国立大学〕				
芸大	1(1)			1(1)
千葉大		1		1
学芸大		1	1	2
横国大			1	1
山梨大		1		1
都立大		1		1
横浜市大		1		1
計	1(1)	5	2	8(1)
〔私立大学〕				
早大	2(1)	6	1	9(1)
慶大	3		2	5
立大	3		1	4
明大	4	6	2	12
法大	2	1		3
中大	3(2)	5	2	10(2)
専修大	3	1		4
上智大	3(2)			3(2)
東洋大	2	1		3
駒大	3(1)			3(1)
国学大	1(1)	1		2(1)
明学大	1			1
日大	11(3)	7		18(3)
青学大		3	2	5
成蹊大	2	1		3
成城大	1(1)			1(1)
学習大	3			3
武蔵大	1			1
東経大		1		1
東海大	6	3	1	10
和光大			1	1
独協大	1			1
理大		2		2
北里大	1	1		2
工学院大		1	1	2
東京農大	1			1
明星大	1	1		2
亜細亜大	1			1
東京電機大	1	3		4
国立音大	1(1)	1(1)		2(2)
武蔵美大	1			1
日本歯科大	1(1)			1(1)
写真大	1			1
桜美林大		1		1
同志社大		1		1
順天堂大			1	1
東邦大		1		1
フェリス学院大	1(1)			1(1)
跡見大	1(1)			1(1)
明治薬科大	1			1
東薬大	2			2
武蔵音大	2(2)			2(2)
東家院	3(3)			3(3)
家政大	1(1)			1(1)
和洋女大	1(1)			1(1)
計	76(22)	48(1)	14	138(23)
〔短期大学〕				
恵泉大				3(3)
共立大	3(3)			3(3)
学習大	3(3)			3(3)
和洋大	3(3)	1(1)		2(2)
大妻大	1(1)			3(3)
青学大	3(3)			2(2)
聖学女大	2(2)	1(1)		1(1)
日大		1(1)		2(1)
跡見大	1	1(1)		1(1)
杉野大		1(1)		1(1)
竹早教員養成		1(1)		3(3)
東海大	2(2)			1
富士短大	1	1		3(2)
駒沢女子大	2(2)			1(1)
東京写真大	1(1)			1
東京経済大	1			1(1)
文化女子大	1(1)			1(1)
国学院大	1(1)			1(1)
目白学園女子大	1(1)			1(1)
武蔵美大	1(1)			2(2)
立正女子大	2(2)			1(1)
東洋英和大	1(1)			1(1)
実践大	1(1)			1(1)
日赤武蔵野女子大	1(1)			1(1)
都高等看護学院	1(1)			1(1)
立川高等看護学院	1(1)			1(1)
国学院大附属	1(1)			
幼稚園教員養成所				1(1)
都立保母学院	1(1)			1(1)
神田外大	1(1)	1(1)		1(1)
杏林短大		2(2)		2(2)
計	37(34)	10(9)		47(43)
〔各種学校〕				
東京スクール・オブ・ビジネス	1(1)			1(1)
文化服装学院	3(3)			3(3)
田中千代学院	2(2)			2(2)
ロゴス外語学院	1(1)			1(1)
津田スクール・オブ・ビジネス	1(1)			1(1)
大東医学技術学校		2(2)		2(2)
一橋スクール・オブ・ビジネス	1(1)			1(1)
池坊お茶水学院	1(1)			1(1)
杉並英語学院	1(1)			1(1)
桑沢デザイン研	1(1)			1(1)
東京調理士学校	1(1)			1(1)
YMCA学院	1(1)			1(1)
新宿調理士専門学校	1			1
村田簿記		1(1)		1(1)
佐伯栄養学校	1(1)			1(1)
荏原職訓	1			1
計	17(15)	3(3)		20(18)
総計	131(72)	66(13)	16	213(85)

	新卒	45年	44年	43年	計
国立大学	1(1)	5	2		8(1)
私立大学	76(22)	48(1)	14	1	139(23)
短大	37(34)	10(9)			47(43)
各種学校	17(15)	3(3)			20(18)
総計	131(72)	66(13)	16	1	214(85)

昭和46年度同窓会役員名簿

役職	氏名	卒業年組		電話
会長	渡辺剛彰	20	A	811－7704
副会長	西岡弘	20	C	811－6311
〃	赤坂正雄	20	C	0498－31－2925
会計	太田敏夫	26	A	0492－61－8169
会計監査	河野一郎	25	A	992－5893
〃	榎本幸三	27	E	812－2653
書記	石野敬子	44	I	203－1065
総務	田口本光	44	H	917－0719
名簿	金井佐智子	44	B	941－7798
会報	柿沼孝明	44	A	911－9561
同期会	小田部司	43	E	969－7561
会館	伊奈健	43	H	814－1085
ダンス	岸本晶次郎	28	F	811－5235

〔退職された先生方〕

阿部乾六先生（校長）
関（高橋）敏子先生（養護）

〔転任された先生方〕

人見春雄先生（教頭）
都立大森高校の校長先生に
宇都宮博先生（英語）
都立千歳ヶ丘高校へ
高田博司先生（生物）
都立目黒高校へ

〔新任の先生方〕

石田弘正先生（校長）
佐藤勇夫先生（教頭・倫理社会）
熊谷重明先生（生物）
朝日良次先生（英語）
本木明子先生（養護）

文京高校同窓会報

紫 筍〈第16号〉

昭和46年9月20日発行
発 行 文京高校同窓会
編集者 橋立 寛・小林正子
野中行雄・岩井芳子・黒田裕子
印 刷 シ ミ ズ 印 刷
電 話（961）2152

文京高校同窓会報